意不。玉川子笑答。或請聽逗留。孔子父母魯。諱魯不諱周。書外書大惡。故月蝕不見收。』予命唐天。口食唐土。唐禮過三。唐樂過五。小猶不說。大不可數。災沴無有小大瘉。安得引衰周。研覈其可否。日分晝。月分夜。辨寒暑。一主刑。二主德。政乃舉。孰爲人面上。一目偏可去。願天完兩目。照下萬方土。萬古更不瞽。萬萬古更不瞽。照萬古。

字解　新天子即位五年は憲宗の元和五年なり、歳次庚寅歳は歳星なり、天には二十八宿あり、十二次に分つ、次はやどる義なり、歳星は十二年にて天を一周する者なれば、一年に一次を行く、歳を年と解するは此より來る、此元和五年は此星がかのえとらの方位にやどりしなり、斗柄、挿子、斗は北斗星にして天の中樞にあり、一年に一周する者なり、柄は北斗星の柄廻れる條道をさしていふ、子は十二子の始なり、月にては十一月に當る、子は滋なり滋はウルホフ義、萬物の下にうるほふ義なり、十一月は一陽來復の時なれば即ち子に當るなり、挿とは斗柄の周りて子方に向ふをいふ、律調、黄鐘律は十二律なり、黄鐘は十二律の主調にして、黄は中和の氣なり、陽氣黄泉に踵て出る義にとる、十一月の一陽來復するに中る、故に斗柄挿子律調黄鐘は十一月をいふなり、森々は木の多き貌、殭立は木の凋落して枯立せるをいふ、鼎、鼎は作力の貌、非常に強きをいふ、銀盤は月をいふ、皎々として輝ける、恰も銀の圓盤を空中に懸けたるが如くなるよりいふ、天色一句は天が紺の樣な色て而して滑らかて、恰かも水が池に平面に凝り湛へて流れざるが如しとなり、青天にて拭ふが如きをいふ、夜なれば青色が紺色の如く見ゆるより紺字を用ふ、氷光、月光なり、曈朧はおぼろなること、龍王宮、龍王の宮殿にして海底にありといふ、蓋し佛典より來れるなるべし、八月十五夜は中秋なり、輪は月輪なり、桂は月中に桂樹ありといふ說諸書に見ゆれば、直に用ひたるなり、太陽の中に烏ある說と同じく荒誕なることは諸家齊く之を辨ぜり、雪山は釋迦の苦行せし處にして、今のヒマラヤ山脈中の一山なり、ヒマラヤ山は世界の最高峯故四時白雪皚々として寒風矢の如し、拉摧ひしぎくだくと、百鍊鏡百回も精鍊したる明鏡なり、照見膽、史記に秦始皇方鏡あり、人の心膽を照し見るとある故事を用ふ、平地埋寒炭は月の暗くなりて平地は灰を埋めたるが如きをいふ、釋名に月死爲灰とあれば、此に用たるなり、火龍は龍の一種、頷下に珠あり、蚌蛤胎、呂氏春秋に月は群陰の本なり、月望なれば則蚌蛤實ち、郡陰實つ、月晦ければ則蚌蛤虛に群陰孳すとあり、此より出づ、環璧共に月をいふ、塔は擊

つなり、挂るなり、煤、炲はすゝ、至神、物、月を指す、炷は燈心をかゝさあげ油をさすと、拚、菱は黝黜に通し薄暗き貌、玳、瑁は形龜の如くたゝ腹背の甲に烘點あり、其大なる者は悉くいて盤盂とすと、嶺表錄異に見ゆ、孔、隙は孔は穴なり、戸、壁などのすきまをいふ、中、庭は庭中、太、陰、一、句陰陽は二氣の名、太は大なり、尊稱なり、精は精靈の氣、陰、陽、家は天文曆象を司るもの、望、日望は望日、日は太陽、朔、月、朔は朔日、月は太陰、孔、子、師、老、子、禮記に孔子禮を老子に問ふとあり其他諸書にも見ゆ、五、色、一、句は老子の十二章にあり、五色は青、黃、赤、白、黑なり、嬌、榮、たをやかに繁榮せること、頑、冬、冬は寒氣激烈なるより頑字を冠す、一、目、は月を指す、徑、圓、千、里、は月をいふ、徐、整の長曆に、月徑千里とあり、癡、骸、狂、癡、な、骸、骨、阿、誰、生は何處から生れたかの意、緣は攀附すると、青、冥は空なり、睚、睫、間はまたゝきする間、拚、塞は拚ひ塞くこと、黃、帝、有、二、目、二目は恐くは四目の誤ならん、韓愈月蝕詩にも四目に作れり、帝王世紀に黃帝力牧常光等を用ひて、分つて四方を掌らしむ、各々己が視るが如し、故に黃帝四目と號すとあり、帝、舜、重、瞳、明、淮南子に帝舜二の瞳子あり、之を明を重ねといふ、重明故に亦四目なり、混、滂、ひろくぼゝとしたる貌、蟲、豸は蝦蟇を指す、豸は匍蟲をいふ、白、兎、月中に白兎ありて藥をつくこと諸書に見ゆ、十、日、燒、九、州、淮南子に堯の時十日並び出てゝ、禾、稼を焦し草木を殺すとある、をいふ、十、日は十の太陽なり、九州は禹が命を奉じて分界したる者にして、荆、梁、雍、豫、徐、楊、青、兗、冀是なり、爍、とくること、爍はいり乾かすこと、丹、砂は赤き砂なり、六、合は天、地四方、烘、あぶり燃すと、黑は死のかまど、決は水をせきとめたるをきりはなつこと、洪、流は洪大なる水流なり、堯の時にあり、し洪水を此くの如く言ひたるなり、擬、はかること、沃、殺ひたし殺すこと、九、日、妖、孽十日出てたるを以て羿に命じて仰て之を射せしむ、其九に中つと淮南子に見ゆ、之をいふ、妖は妖怪なり、但、見、一、句、赤、子は人民、臟々は角多き貌、此句は洪水汎濫せるを斯くいひ廻したるなり、九、御、人の御者なり、御は日を御する者をいふ、節、幡、共に旗の一種なり、幢、旒、幢は旗旒ははたのあし、蛟、螭、虬、皆龍の一種にて鱗あるを蛟龍といひ、角あるを虬龍といひ、角なきを螭龍と云、六、九、六は老陰九は老陽の數なり、極數故とりし迄にて別に意なし、掣、はうつなり、九、火、輞、九火は九日なり、輞は轅なり、九日を載せたる車のなかえをいふ、齲、齵は齒正からざる貌、輪、は口をいふ、口の開きたる形輪の如きよりいふ、爬、鉤、かきてつりあぐること、推、蕩、推しうごかすこと、轟、匐、轟きひゞくこと、紅、鱗、は龍の鱗をいふ、鵠、鳥、ほのほの鳥、日の中には烏ありといふ、俗說あるよりいふ、翎、鬣、翎はつばさ、鬣は龍の口ひげ、醆、鄒、聲のがさむさするをいふ、撑、拄、共にさゝふること、肚、は胃なり、礧、磈、石のいろ〳〵相轉する貌、塡、は埋むること、飢、坑は飢えたる口のと、當、食、堯の時の

九日をいふ、撒おさへ持つこと、不當食は現時の月をいふ、哆は口をひろぐると、皆は口ばし、劉は殺すと、嗜はめくら、良工は良醫なり、訣はたつと、常娥氏淮南子に羿不死の藥を西王母に請ふ、姮娥之を竊みて月宮に奔る、姮娥は羿の妻なり、藥を服し仙を得、奔つて月中に入り、月精と爲るとあり、姮娥は常娥なり、扁鵲古の名醫春喉戈史記魯世家に、文公十一年甲午、翟(狄と同じ)を鹹に敗り、長翟(狄の長なり)嬀如を獲たり、富父終生(魯の大夫)其喉を春つき戈を以て之を殺すとあり、その故事を用ひたるなり、晴ひ、とみ晴上物こゝにては蝦蟇をいふ、朦朧おぼろなると、抹はぬりつくること、榻は長き床几、蟣虱はしらみ、告愬は告げ訴ふること、梯磴はしごと石だん、封詞一句愬の詞を封じ風に付托して我小心を奏すとなり、颯排は越え推し開くこと、閶闔天門なり、紫宮は紫微宮にて天帝の居所玉几王のつくゑ、擘圻裂きひらくこと、東方二十八宿を東西南北に分つ、東方は其一以下南方西方北方皆然り、又東宮南宮西宮北宮ともいふ、蒼龍東宮の主宰者にして蒼帝といふ、其精を龍となす、故に蒼龍といふ、角は東宮第一の宿星なり、角故に挿むといふ、尾は其第六の宿星なり、尾故にうつといふ、心は其第五の宿星にて天王の位なり、屬星三ありて其の中を明堂といふ、明堂は王者政を執るの堂なり、統領三百六十、鱗蟲大戴禮に鱗蟲總べて三百六十あり、龍之が長たりとあり、故にいふ、火鳥は朱鳥なり、南宮の主宰者を赤帝といひ、其精を朱鳥と爲す、朱鳥は朱雀なり、項尾短、朱雀は項長く尾短し故にいふ、跋疐いざりゆくこと、井冠、井は南宮第一の宿星なり、故に冠といふ、達枿南山の詩の條に解釋す、月蝕鳥宮、一句月が南方に周りゆきて十三度蝕せられたるをいふ、鳥爲居停一句鳥は月を停め居く主人となりて、蝕せらるるを覺えざるをいふ、赤口毒舌は火鳥の口舌をいふ、毒蟲蠆を指す、眨は目を動すこと、鬼眼朱鳥の眼をいふ、突窩空しく穿てる貌、擾虎西宮は白帝之を主る、其精を白虎となす、擾はつかむこと虎の形容なり、蹻々つまだてる貌、犧牲四方第二の宿星を婁といふ、苑牧(牧人なり)となり犧牲を養ふていて郊祀に供する職なり、牲は牛羊豕をいひ、犧は其色純白なるをいふ、封豕西方第一の宿星を奎といふ、一名を封豕といふ、偷犧牲食封豕は主星は虎にして其部下の星に犧牲を掌るもの、又は封豕といふ名ある者あるより、かゝる戲語を作りたるなり、樹しゝむら、准擬なぞらへること、虎を西方の主宰者に准へ置くをいふ、寒龜北方の主宰者は黒帝にして其精を玄武と云、玄武は龜の異名なり、緯略に龜は水族なり、水は北に屬し其色黒し、故に元龜といふ、甲あり、能く捍禦す、故に武と云とあり、北方故に寒し、故に寒龜と云、蛇は蛇なり、北方に螣蛇星あり、故に被蛇縛といふなり、被蛇縛は虎が犧牲を偷み封豕を食ふと同じく戲語なり、殼は龜甲の内をいふ、緊まとふと、夏蓋北方の第

一宿なる斗星の屬星に鼈星あり、之を云、此星斗の南に在り、夏は南に中る、故に夏字を冠す、牖はあつもの、牀脚は寢臺の脚、支牀脚とは寢臺の脚の支へになるといふ意、鑽灼龜甲をきりやくこと、龜甲を灼きてトするなり、歲星天に五星あり、五德の主たり、歲星は其一にして人主の象なり、故に主福德といふ、董、秦董は董翳ならんか、翳は秦將にして項羽に降り三秦に封せらる、故に董秦といふか、猶考を待つ、黔婁は齊の隱士にして道を守りて屈せず、威王之を師とせりといふ、熒惑は五星の一にして方伯の象なり、無法を執り無道を司る故執法といふ、翼、鑠翁は熒惑が常に四方を元氣よくまわるよりいふならん、年々一句、太微は太微宮にして一大星坐の總稱なり、故に又太微宮とも云、熒惑星は毎年十月に太微宮に入り、制を受け出てゝ二十八宿を行り、無道を司る、故にいふ、支盧一句は十二支なり、十二支は十二辰にして、十二辰は十二次なり十二次は星の運行してやどる所なり（詳解は初に出づ）此次十二支の位に配當する所より、此に支字を用ふ、盧は牢獄なり、執法官ゆゑ支の獄屋を見廻るといふより、支盧といふ、太微宮より出てゝ支盧即ち地方を廻るなれば謫罰せらるゝといふ、執法者にして月を蝕する蟲を糺さず、されば地方に追ひやらるゝも災凶ではないとなり、土星五星の一なり、土地を掌る、土星性相背一句は土星は土地を掌る役目なれば土地の性質はよく知悉して居られねばならぬ、土地の性質は禍德を養ふものて、禍害を生ずるものてない、然るに只今はこれに反して、基の如き禍害の蟲を生ず、全く土性と相背くものて其職分をつくしたとはいへぬとなり、今夜一句、會は時々見る意、言ふ心は今夜月は蝕に蝕せられた、それゆゑ此かたらはたまにも月を見るとが出來ぬとなり、太白五星の一なり、天將の象なり、故に將軍と云、鋒鋩はほこさき、恒州陣一句、恒州は恒山の地方の州なり、恒山は今の直隷省正定省にあり、斬鄙定の事未た詳ならず、考を待つ、項骨うなじの骨、脆柔かさと、臺菁かぶらな、辰星五星の一にして廷尉の象なり、故に廷尉に任ずといふ、刑律を掌る、天律天の刑律なり、皐陶堯舜の時の名法官なり、三臺文昌宮、文昌星は天の六府なり、孝經援神契に、文は精を聚る所、昌は天紀を揚く、輔拂並ひ居て以て天象を成す、故に文昌宮といふとあり、此星は凡て六星より成る、上將（威武を建つ）次將（左右を正す）貴相（文緒を理む）司命（災告を主る）司中（左理を主る）司祿（功を賞し士を進む）是なり、一星各々一府をなす故に六府といふ、三臺は上臺中臺下臺三星の總稱なり、又陰陽を和し萬物を治むる重要の位置に在り、かく二星は天の中樞の星ゆゑ作上天紀綱といふ、二十八宿の名は後に出づ、磊々石の重なる貌、尚書郎太微垣中の星の名、此星は極めて順序正しく羅れるより、整頓排斑行といふ、排は排列、斑は序次なり、劒握他人將他人の將軍の劍を握ること、尚書郎の西北に郎將

といふ、將軍の星あり、尚書郎を衛る、此句は尚書郎がこの將軍の劍を握りての意、一四は尚書郎の一方側の四星なり、太陽は紫微垣中の星の名、天市は天市垣、以上太微、紫微、天市は星座の大總稱なり、大匠郎將を指す、弧矢は星名、南宮張宿に屬す、天弓なり、引滿一パイにつるを張ると、反射入光の地にさすをかくいふなり、天狼星名上に同じ野將たり、呀啄口を開き啄まんとする貌、癡牛は牽牛星、嫉女は織女星、二星天河を隔てゝ相親む、故に之を恩として癡嫉の字を冠す、蚩尤は星名旗を象る、故に簸旗と云、簸は箕にて糠をとるとその如く旗をふるなり、旬朔は旬は十日朔は一日こゝにては歳月をいふ、天鼓星名、史記天官書に音あり雷の如しとあり、璫琅は耳飾りする玉の鳴ること、枉矢星名、蛇の如く行く故に能蛇行といふ、眈目はつきりとせぬ目、枉矢は蒼黑なり故にいふ、森々木多き貌、枉矢は之を望めば毛羽有るが如し故にいふ、天狗星名、史記天官書に聲あり其下りて地に止る、狗の墮る所に類す、及び炎火あり、之を望めば火光炎々として天を衝く云々とあり、舒はむること、滂々盛に流るゝ貌、譎險譎詐危險、萬々黨萬々も相黨することにて、以上の多くの星をいふ、眯目は目がくらむこと、亹成就亹は勉むること、成就は自分の身を害せず成就すること、北極天の北極なり、此外は北斗以外即ち以上列擧したる諸星をいふ、

○附言　以上天文上に關する支那上代の說を摘要して明瞭ならしめん、凡て天には南極北極の兩軸ありて、宗動左旋の樞紐となれり、星座に三垣二十八宿ありて、三垣とは紫微、太微、天市をいふ紫微は北極を中心とせる周羅の諸星の總稱にして、諸星の中樞なり、紫微、太微は衆星雜坐の中に混ぜる星の總稱なり、廿八宿は天の周圍にある星の主なる總名にして、角、亢、氐、房、心、尾、箕（以上東宮に屬す）斗、牛、女、虛、危、室、壁（以上北宮に屬す）奎、婁、胃、昴、畢、觜、參（以上西宮に屬す）井、鬼、柳、星、張、翼、軫（以上南宮に屬す）是なり、東西南北の四に分轄せらる、五星は以上の外に在る五大星なり、尚書郎は太微垣中の一星牽牛織女は二十八宿の牛、女二星にあたり、弧矢、天狼、蚩尤、天鼓、天狗、枉矢は宿星の附屬星なり、猶詳くは天文書に就きて知るべし、

當時はそのかみ即ちいつよりかの意、常星常夜に出つる星、殞雨落つる星をいふ、左傳に星殞ること雨の如しとあるよりいふ、善善二句、齊の桓公郭に之き父老に問ふて曰く、郭は何故に亡びたるか、曰く其善を善とし惡を惡とするを以てなりと、公曰く子の言の若くなれば賢君なり、何ぞ亡に至らん、父老曰く、郭君善を善として用る能はず、惡を惡として去る能はず、亡ぶる所以なりと、郭は何れの國なるか詳かならざれども、多分、東虢ならんといふ、虢は春秋時代に於ける一小國なり、緊しまること、格々は擧る貌

吻は口びる魄は形なり、月の輪をいふ、磔裂き殺すこと、穹碧青空なり、慘澹ものすごきこと、春秋は魯の史記にして孔子の修定せられたる者なり、魯を中心として列國に及ぶ、二百四十年、春秋は隱公に始り哀公に終る、凡て二百四十二年間の事を記す、諱魯不諱周、二句は春秋の筆法にして魯は父母の國ゆへ大災や國惡は諱みてかゝれず、周の如きは王室なれども諱まれず、又外國は大惡を書さるれど、魯は諱まるといふこと、咄々驚き怪む聲、逗留は止ること、三は三王五は五帝、災沴は災難に同じ、瘠病の差をいふ、研覈は研究して考ふること、日分晝三句太陽は晝出て、月は夜出づ、二つの出づるに由りて晝夜を分つ、故にいふ、日は暖く月は寒し、故に辨寒暑といふ、瞽はめくら、

義解　此詩は元和五年十一月十四日の月蝕を詠じたので、元和の逆黨を譏りしものといふ說があるが、元和逆黨は此より後のことゆゑ、間違てあるとが分る、併し微意ある事は確てある、起句より比並不可雙に至る十二句は、月の出てたるを敘し、此時怪事發より孔隙千道射戶外に至る二十句は、月の蝕せられたるを敘し、玉川子より便此不吐出に至る九十一句は、月を蝕するの蝦蟇を責め、又天下の非類に恩せし失をいふ、玉川子又涕泗下より無信他人忠に至る、百十四句は、天帝に告愬の詞にて、四宮の帝、五星より其他の諸星の天に在りて、蝦蟇月を蝕するを傍觀せるを責め、北斗を以て相とし他は皆掃除して月を贖はんとをいひ、玉川子詞訖より感荷天地力に至る十八句は、天帝の我愬を納れて蟇を誅し月光の再び現はれたるを感荷し、或問玉川子より結句まての三十四句は、微意のある所にて月蝕に就て咄々詞を弄するは、敢て國惡をさらすに非ず、あげて以て反省勉勵せんことを望む意を述べて居る

天子新たに位に即かれた五年に、歲星は庚寅の方位に次どり斗柄は子の方位に向ひ、律は黃鍾を調べ、こゝに十一月となつた、多くの樹木は殭立して寒氣は馬鹿に强く頑固に風も無い夜に、燦爛たる月が海底の方より出て、我草屋の東を照した、天は紺色て滑かて、池に水が凝り滯へて流れざる如くである、月光は氷の如くこの青空を交貫して、おぼろに見ゆる、初は白蓮花が龍王宮から浮び出たかと疑はれたが、出てしまうと中秋と比べ並べても、雙ぶることの出來ないよい月であつた、見て居ると怪しい事が起つて、或る一物が月をば呑食して來た、輪は壯士の斧で斫壞するが如く、桂は雪山の風でうちくだく如く、だん〳〵缺けてなくなる、今までは百鍊鏡で膽を照し見るが如く、皎々と凡ての物が分明に見えたが、今は平地に灰を埋めた樣に暗くなつた、それが恰も火龍の皎々たる珠が腦から出てゝ、却つて蚌蛤の胎內に入りてしまつた如くである、月の環が摧かれ壁が破るゝのが眼で看盡した、其天にかゝつた模樣は煤煙の

如く、しばらくの間に皎々たる蹤跡を磨滅して、便ち萬古も開く可らざるが如くてあつた、思はんことであつた、此の月が此の如き大狼狽のことあらふとは、月の光が隱れたので、星は沙をちらす樣に出て、頭を爭ふて光の大ならんことを事として居る、又た奴婢は急に暗燈に燈心をかき油をそゝぎてあかるくしたか其の光は薄暗くて玳瑁の色の樣である、月か愈暗くなる程に星は今夜は時を得顏に燄を吐いて長きことが虹の如くであり、又燈の光はすきまから千條になつて戸外を射りつけて居る、玉川子は此有樣を見て涕が落ちた、そこで庭中を獨りて行きつゝ此日や月は如何なる者であるかと念ふて見るに、これは太陰と太陽との精靈の氣である、皇天は總ての物の狀態を能く識らんことを要せられて、日と月は乃ち化生されたのである即ち太陰の精氣と大陽の精氣とが天に走り行いて、汲々と四體を勞して働いて、皇天の爲に此眼即ち月と日とを作りて、光明を放つ樣にした、故に此眼が今の如く自ら光明を保たぬ時は、皇天の公の行道は何に由りて行れやうや行はれぬ、吾陰陽家の說く所を見るに彼には望日に日が月を蝕すれば月光は滅し、朔日に月が日光を掩へば日光は缺くるもので、此二の眼は相攻め合ふ物でないと、いふ說があるが吾は此說を容れない、又孔子の師とし學はれた老子は五色は美しいものであるから、人はそれに見とれるときには明を喪ひ盲になるといはれた、吾は皇天が人の樣に色彩を好んで、それて心を喪ひ明を喪はれたかと恐れた、幸今は春でないから、萬物は嬌榮せず青山は破瓦の色を帶び、綠水は冰が峻しく張りつめ、花は枯れて女の艷ぽいやうな色もなく、鳥は死んで歌ふ聲も沈みて居るから仕合せであるが、頑固な冬の神は何の好む所ありて偏に一目を盲にさしたことであるが、誠に不屈ではないか、古老の物語を傳聞すると、月を蝕するのは蝦蟇の精靈であるといふ、直徑千里のこの圓い月を汝蝦蟇が腹に入れて、かく暗くしたのである、汝が此の狂癡な骸骨は何處から生れたか、海窟から來て空に攀ち上るとを解したのであらうか、恐くばまたゝきする間に、皇天の眼を揜ひ塞いで化成したものであらふ、昔の聖王たる黃帝は四目あり、舜帝は重瞳子であつた、二帝は各、四目を懸けて天下に照臨されたから、四海は光輝を生じ人民は大なる幸福を得たが、吾は二帝に遇ふとが出來ぬから、唯ひろ〳〵ぽーとして分らない、何故に皇天の瞳子は上に懸つて居つて、坐ながら蟲けらの欺を受けたのであるか、長嗟に堪へない、白兎は月中で靈藥を搗いて居る、それがちようど姦非即ち蟇を防ぐに意あるに似て居る、藥が出來上つて臼に滿ちて法度に中らず、蟇に害せらるゝ樣では、白兎に委任しても、何も仕樣がない、憶ふに昔堯帝が天下を治めらるゝ時、十の日が出てゝ九州を燒きつけ

た、それて金はとろけ水銀は流れ玉はいり乾き、丹砂は黒く焦げ、天地四方はあぶり燃えて黶(カマ)となつた、そこで堯の心は多くの憂を增した、天帝は堯の心の憂ひ居るを見て、勃然怒を發して洪流を決し、立所に九日の妖怪をひたし殺さんとはかられた所が、天は高く日は走り逃げて、ひたしてもとゞかなかつた、そこて天下は大水となつて、却て萬國の百姓が水にひたされて、角が生ひ魚の頭が出來て來た、此時九人の御者が九の妖日を導いて、互に爭ふて節幡を持ち幢旒にて麾いて車に駕し、六九五十四頭の蛟龍璃龍虬龍にひかせて電光を掣つて、九日を載せた輈を引き去つた、其時汝(蘖を指す)若し蝕せんとして齟齬たる口を開いたならは、九御は轡を御し索を執つて、九日を龍と共に相かきつりあげて、推し蕩かして、ドンと汝が喉に入れよう、されば龍の赤い鱗や、日中に居る、ほのほある鳥が、口を燒いて快からふ、また鳥のつばさや龍のくちひげが、口中に倒かさまになつて、聲ががさひさするてあらふ、而して腸胃をさゝへ〳〵て、石のごろ〳〵する山邱の如くなつたら、自ら飽いて死すべきも、かゝる時には、更に天の眼(即ち倒月)を偷まない、此時九日を偷み食はゞ獨りて己れが飢えた坑口を埋ひるのみてなく、亦堯帝の心配を解く、わけてあるが、誠に遺恨てある、汝はかゝる食ふべき時には、頭を藏くし腦を撅へて肯て食はず、今夜の如く食ふ可らざる時には、脣を張り髯をひろげて食ふて休まない汝はかく天の眼を食ふて其逆命を養ふて居る、どうしたら上帝に汝を殺すことを請ふことが得られるてあらふか、嗚呼人は虎を養ふて虎に齧まれ、天は蘖に媚びて蘖の爲にめくらにされた、そこて己と同類に非ざる者に恩を施すと、一一自ら災害をなすことを知つた、吾眼を患ふる人を見るに必ず良醫をさがし求めて、きり開くる、想ふに天も亦人と異ならざれば、眼を愛するのは固より一つとてあらふ、どうか嫦娥氏をさがし得て來て、扁鵲の術を習はしめ、而して手に喉を舂く戈をとりて、此ひとみの上を拚ふて居る物をとり去りたい事じやと思ひつゝ、上を見ると、月が蝕せられた其初は、猶おぼろてあつたが、最早久しくして膝を塗りつけた樣になつた、たゞ心配なのは嫦娥氏がひとみの上を拚ふて居る物をとる功業が成就しても蘖はひとみまて食ふて居るから決して此を吐き出さぬといふ事てある、そこて玉川子は又涕が落ちた心の中に月の安全てあらんことを祈り、再拜して榻に額をつけた、而していふた、地上のしらみの如き臣全が、帝天皇に告愬します、臣が心に鐵が一寸あり妖蘖の癡膓を刳くことが出來るけれども上天は臣が爲に梯磴を立てゝ下さらない、臣の血肉の身ては自在自由を得られぬから夫に上りて蘖を殺して天の光明を揚げ輝すに由がない、それて詞を封して風に付托して小心を奏します、さらば風は天門をこえ

ひらきて紫宮に入り、密かに玉几の前に近づき封をさき開いて奏上するであらふ、其の意は臣仝の頑恐の胸、敢て惜まずに、死して天に横はり、天に代りて天の長たる者の爲めに謀りませう、東方の蒼龍は、角に戟を挿み、尾に風をうち、心に當りて明堂を開き、三百六十の鱗蟲を統領して居る、坐して東方の宮を治めて、居ながら月の蝕せらるゝも救ひ援けない、あるも無きも同じとてある、されば蒼龍を用ひて東方を治めさする要はない、南方の火烏は赤い事が血を潑した樣てある、項は長く尾は短く、いざりつゝ飛んて、頭には井冠を戴いて高く聳えて居る、今月は烏宮に來りて蝕せらるゝ十三度に及ぶが、烏は月を停め居く主人となりて、其墓に食はるゝをさとらない、貪りに何人の冢に向つて赤口毒舌をやるべく行いたのてあるか、毒蟲(蝦蟇)が頭上に月を喫却しても、喙み殺さず、空しく鬼の眼の樣なくぼんだ眼を動かして居るのみてある、其不屈な罪は雪く可らざる者てある、西方の搬虎はつまだち立ちて居る、其牙は斧の如く齒は鑿の如くあつて、たゞ犧牲を偷み封豕を食ふのみて、何もせない、大墓の一臠は固に歃かて美いてあらふが、墓が月を蝕するを見て見ないふりをして居るのは、如何なる道理てあるか、爪も牙も天から根を出して天の事は少しも念はない、天帝もし此虎を以て西宮の主に准擬さるれば、准擬を錯つて居る、北方寒龜は蛆にしばられて、頭を

藏し殼にかしこんて獄に入る樣てある、蛇の筋て束ねまとうて、又た束ねて殼を破つた、寒龜夏鼈は一種の味がある、また當に其肉を以て臘に充つるべきてある、死殼は何の役にも立たず之れを用ふ可くまかす所はない、たゞ寢臺の脚の支へになる位て迚も鑽灼されて、天の爲に月眼が復するか如何かといふことをトするに堪へない、歳星は福德を主とりて居る、それて官爵を董秦の樣にまても與へ點褒の如き清貧の士を世の中に生じて尸を覆ふに衣巾なからしむるが如き、窮境に置くに忍びない位なのてあるのに天が眼を失ふても弔はない、歳星なんぞ其れ仁てあらふやありはせぬ、熒惑星の健氣な翁は、法を執ることが大に中らず、月の明は罪過なきに蝕災に罹つた、然るに其蟲を捕へて糾すことをせない、されば年に十月に太微宮に朝し支盧に諷爵せらるゝのも、どうして災凶てあらうか、當然てある、土星は己が掌る土性と相背き、福德を養ふ職分に反して、墓の如き禍害の蟲を生した、それて月は人の頭へきて食はれて、死んて破敗してしまうた、今夜かく月は蝕せられた、さればこれからはたまにも見ることが出來やうや出來ぬ、これ必竟土星のおちどてある、太白將軍は怒激して鋒鋒が生じ、垣州の陣に鄒定を斬りて進むた、項の骨の柔な事は春の蓬菁より甚たしく、誠に容易に斬つたが天はたゞ兩眼のみて其の中今の如く一眼を失ふた時には將軍何

れの處に天兵を行ることが出來やう、されば蟇を斬るのは當然の務てあるが、何とも思ふては居らぬ、辰星は廷尉に任ぜられ、自ら刑律を主持する故深刻てある、それて人の命も盆底に物がある如く自由にする、されば今月が蝕せられても氣毒とも思はず、固とに樂んて見て居るてあらふ、天帝若し肯て此を信ぜざれば誠に皐陶の鬼を呼びて一度問はれて御覽なさい、必ず今日の如く實際に月蝕を救はんともせざるとてあらふ、三台文昌宮は上天の紀綱をなして、二十八宿が天を環のやうにめぐつて居る、石の重りた如くある尚書郎は、其排列が秩序正しく整頓して、行いて居る、それに郎將の劒を握つて、一方の四星は太陽星の側に、一方の四星は天市の傍に居る、かく斧を操り大匠の郎將に代るのだから、失敗して兩手を傷くるのは當然てあるが、それを怕れもせず、柄にないいらぬ事をして居る、夫よりか月を守つて蟇に食れない樣な處置をすればよいのじや、弧矢星は弓を一ぱいに張つて、蟇を射ずに反つて人を射りつつ光つて居る、天狼星はたゞ口を開いて、ぴか〳〵光らして居りながら毫も蟇を食ふことをせぬ、癡物の牽牛星と睽ろかな織女星は、肯て農桑を勤むることなく、徒らに苦勞して淫奔な思を心に含み、朝夕河を隔てゝ相望んて慕ひこがれて居る、何にも役に立たぬ、蚩尤星は旗をふり廻はして歳月を弄して居る、また天鼓星をうちて、耳だまの鳴るやうな音がする、何にも蟇には頓着ない、枉矢星は能く蛇の如く列り行いて居るが、たゞはつきりせぬ目をしげく張つて居るのみてある、又天狗星は下りて地を舐めて、盛に血が流れて居る、此の如く譎詐て危險な星どもが萬々も相黨して、天上に木を架し構へた樣に列つて居るから、蟇などがどうしても、當りによりつくことが出來ぬわけだが、彼等は目くらめつぽうに好きな事をして、蟇を殺す所か、自分の體が滿足に成就すればよいといふ事のみ勉めて、却つて我光明王を害せられた、誠に彼等如きはありても益に立たぬものてある、て、願ひます、北斗一星のみ留めて北極に相とし、中央に懸けて萬國を指麾させたい、此外の衆星は盡く掃除して、堆積して山岡の如くにして、一方にかたよせ、而してそれを以て我父母の光を贖ひ返したい、いつの事なりしか常夜に出つる星か沒し、それが落つるとが槃の迸るが如くあつた、是によれば天は事理を會得されて立たれ、叱喝して此等衆星の役にも立たぬ奸强の徒を誅せらるゝに似て居つたが、近頃はかゝることはない、何故に中道にして處置を廢し、自ら今日の如き殃を遺されたのてあるか、善を善として用ひず、惡を惡として去らざるは、郭公の亡びたる所以てある、願はくは天神聖心よ、深く玆に鑒みて他人の忠言を信ずるとなく、吾言を用ひ下されと。玉川子の詞は訖つた頃、風色がしまつて何となくあがる樣になつた

來て、月の暗黑の邊に近く、劍戟を動す如くあつた、しばらくすると、癈墓の二の吻は自然に分れさけて、月は初めて半分の璧をあらはし、漸くにして滿輪を吐き出した、衆星は盡く原の如く赦され、一つ墓のみ誅磔せられ其拚塞した腹肚は忽ち脫落して月の眼は舊の如く碧空に挂つたけれども光彩は舊の如くに蘇し來らずしてものすごく一片の白いものゝ如くあつた、何うしたのか萬里を照す月の光は、此の呑吐の災厄を受けたのであるが、吾は兎に角再び安全に天の眼を見ることが出來たので、天地の偉大なる力に荷ふた恩を感謝する、時に或人が玉川子に問ふて、孔子は春秋を修められたが二百四十年の間で、月蝕は盡く收められない、今子が月蝕について咄々の詞は孔子の意に合へるや否やといふた、玉川子は笑ふて答へた或人は止つて聽かんと請ふた、玉川子は實に左の如くいふた魯は孔子の父母の國である、それて春秋にも、魯は諱みて書かれないことがあるが、周は外國であるから王室ても諱まれない、又外國の事を書せらるゝ時は大惡を諱まずに書せらるゝが、魯國には諱まれる、それて月蝕があつても不祥ゆえ、諱みて收められない、されば毫も不審に思ふ事はない、而して予が命は唐の天に生れ、予が口は唐の土に食みて居る、唐の禮は三王の代に過き、樂は五常の世よりも過ぎて居る小さい事は固より夥して猶說ききれない位ある、大きな事も亦多くて數へきれない災沴の病には小大の差といふ者はない、どうして衰微せる周室を引合に出して、我盛なる唐室に比し其可否を研め考ふることが出來やう、とても比較にならぬ事じや、日は晝を分ち月は夜を分ち、寒暑を辨別し一には刑法を主とし二には恩德を主とし即ち恩威並び行はるれば、政は舉るとてある、どうして人の面上の一目をかた〳〵去る事が出來やうや出來ぬ、願くは天帝よ、兩目を完くして、萬方の土を照臨しで萬古に至るも更に替せず、萬々古に至るも更に替せず、萬古を照臨して下さりませ、

詩評　盧仝の詩は演繹的て平易ならざる所が韓愈の流派に屬する所てあるが、韓愈は物を形容するに普通的て專門的てあらぬ即ち南山の詩が其の一例を證明して居る通り何人にも理解せらるゝ樣に作られてある、然るに盧仝の此詩を看ると太た多く支那古代天文學上の語を用ひて居るから少くも諸星の位置及び其の關係等を知らされば茫乎として理解し能はぬ、されば詩は此に至りて又一變遷を爲して居るといつてよからふ、而かも仝は奇想を以て之れを驅使して居るから此等の專門的の語も自ら趣味を含蓄して居る、

李賀

李賀字は長吉、王族で鄭王の後である、夙に韓愈に知られ、大に益を受けた、常に小奚奴を從へ、驢に騎り一の古く破れた錦囊を背にし、得る所あれば即ち書して囊中に投し、暮に及んで歸るが、毎日の例で大醉した日か、弔喪の日でなければ、この例を廢せなかつた、それで他人の如く題を立てゝ、思慮を牽合して詩を作るといふことはなく、誠に面白い人であつたが、天は此に年を假さず、元和十一年(西暦八百十六年)僅に二十七歳を以て卒したのは、惜しむべき事であつた、

苦晝短

飛光飛光勸爾一杯酒。吾不識青天高黃地厚。惟見月寒日暖來往。煎人壽。食熊則肥。食蛙則瘦。神君何在。太一安有。天東有若木。下置咮燭龍。吾將斬龍足嚼龍肉。使之朝不得迴夜不得伏。自然老者不死。少者不哭。何爲服黃金吞白玉。誰是任公子。雲中騎白驢。劉徹茂陵多滯骨。嬴政梓棺費鮑魚。

字解 飛光は日月の光をいふ、煎は煎し乾かすこと、食熊、二句熊掌は美味にして富貴の者之を食ひ蛙鼃は粗味貧賤なる者之を食ふ、神君、太一、皆神名にて、漢武帝が之を招いて延壽を祈りしこと、史記封禪書に見ゆ、天東、二句山海經に曰く、西北海外大荒の中に、洞野の山あり、上に赤樹あり、青葉にして赤華、名けて若木といふと、郭璞の注に其花光赤くして下地を照すとあり、楚辭に日安不到、燭龍何照とある句の王逸の注に、天の西北に幽冥無日の國あり、龍燭を咮みて留りて之を照すとあり、是によれば若木は天東に在らず、燭龍亦若木の下に在らず、矛盾する樣なれども、此はたゞ譬をこゝに借りし迄にて、燭龍を日に喩へ、日は東から出づる故天東といひしならん、黃金白玉抱朴子に金を服する者は壽金の如く、玉を服する者は壽玉の如しとあり、任公子は古仙人にて驢にのり上天せしものならんといふ、其事詳ならず、劉徹は漢武帝の姓名、茂陵は其墓地なり、嬴政、秦始皇の姓名、梓棺は天子を葬る棺、費鮑魚、始皇巡幸して沙邱の平臺に崩ず、丞相李斯其國内の騷擾せんことを恐れ、秘して喪を發せず、轀涼車に載せ、寵幸を蒙りし宦者を參乘せしめ、生けるが如く裝ひしが、暑中臭を放つので、一石の鮑魚を載せて其臭を亂り、都に歸りて喪を發せりといふ、二帝皆神仙を求めて壽を祈りしより、こゝに引けるなり、

義解 此詩は晝の短きを苦しむを以て題名とすれども、其意は神仙を求め壽を祈るの益なきをいへり、飛光よ飛光よ、汝に一杯の酒を勸めるから、マー聞いて呉れ、吾は天

は青々として居るが、其高さがどれ程あるか、又地は黄色であるが、其厚さがどれ程あるか、少しも知らない、たゞ月光(飛光の一)は寒く、日光(飛光の二)は暖く、照し來て人の壽命を煎し乾かすことを知つて居るのみである、人は熊掌の樣な甘い物を食へば肥ゑふとり、蛙黽の樣なまづい物を食へばやせることは分つて居るが、どちらにしても早いか晩いか死んでしまうもので、迚も壽命は得られない、昔し漢の武帝は神君や太一を招いて壽を祈り求めたといふが、其太一、神君はどこに在すのであるか、處が分れば呼んでほしいものである、能く聞いて見ると、天の東に若木があつて、其下に燭を喞める龍が置いてある、其龍が朝は起きまわるので此世界が晝になり、伏すると夜になるといふとてある、かく出たり伏したりするので、晝夜が分たれ、夫から歳時も出來、人間も死するといふ、不祥な言も起るのである、それで吾は將に此龍の足を斬り肉を嚙みて之をして朝起き廻ることも出來ず、夜も伏することが出來んやうにしようと思ふそうすると其燭は永恒に此世界を照すから、晝夜もなく歳時もない、されば晝が短いとて苦しむ必要もなく、自然に老者も死せず、少者も壽命のちゞまるのを、哭する悲嘆もない樣になるであらふ、若し此くなると昔の人は黄金を服し白玉を呑まば金や玉の如く壽を得るといふて居るが、何にもそういふ手數はいらん事じや、又彼の任公子は白驢に騎して雲中に入り上仙したといふ話だが、そういふ御苦勞もいらん事じや、又劉徹や嬴政は仙道を求めて、壽命を祈つたが、すぐ死んでしまうて、茂陵には徹の滯れる骨が多く、政の梓棺は其臭を防ぐ爲に多く鮑魚を費した事もあるが、そういふ馬鹿げたこともなくなるであらう、(けれども此くなる事はない、生死命あり、人力の得て如何ともすべからざる所なれば靜に天命を俟つべきのみ、仙道を求むるが如きは誠に愚の至てある)、

[詩評] 李賀の詩は瑰奇にして想像に富み警邁にして一種の熱情を含みて居る、蓋し天分秀てたる所があるからだらふ、韓愈の門下より出てたりと雖其の飄忽の才は寧ろ李白に近い處が有る、故に古人も評して鬼才といつて李白の仙才に對稱して居る、昌谷集を見るに洞庭雨脚來吹笙、酒酣喝月使倒行、といへるが如き、飛香走紅滿天春、花龍盤盤上紫雲、といへるが如き、女媧煉石補天處、石破天驚逗秋雨、といへるが如き、黑雲壓城城欲摧、甲光向日金鱗開、といへるが如き、遙望齊州九點烟、一泓海水杯中瀉、といへるが如き、青霓扣額呼宮神、鴻龍玉狗開天門、といへるが如き、皆人意の表に出づるもの此種の奇句在在乏しからず、後世此流派を酌むもの宋の謝皐羽、元の楊鐵崖等、代代少くない、李賀は實に自ら一派を爲して居る、

張籍

張籍、字は子昌、蘇州の人である、貞元十五年進士に及第し、諸官を經て國子司業にまで進んだが、晩年に不幸にも明を失ふたので、是より出世はせなかつたが、全力を詞藻に注ぐことが出來たから、名を後世に輝すに至つた、つまり不幸が幸となつたのである、韓愈の門人で、別に一派をなし殊に樂府に工である、

節婦吟

君知妾有夫。贈妾雙明珠。感君纏綿意。繫在紅羅襦。妾家高樓連宛起。良人執戟明光裏。知君用心如日月。事夫誓同生死。還君明珠雙淚垂。恨不相逢未嫁時。

字解 雙は一對なり、明珠は光る珠、三秦記に武帝昆明池に戲る、大魚の索を銜むを見帝之を放つ、後復池上に遊び、明珠一雙を得たり、帝曰く、豈昔魚の報かといへる故事に本づく、纏綿思ひ亂るゝ、貌襦襦袢なり、明光御殿の名

義解 宋の洪邁の容齋隨筆によると、李師古が書幣を以て張籍を辟したが、籍は却けて納れず、節婦吟を作つて之に寄せたとある、

君は妾に夫あることを知りながら、妾に一對の明珠を贈り下されました、君が思ひ亂るゝまでに慕はるゝお心もちに感じまして、紅羅の襦袢にかけてなつかしく思ひます、妾の嫁して居るうちの高樓は、苑囿に連りて起り巍然して居り、良人は戟を執りて明光殿裏に守衛して居ります、妾は君が心は日月の如く光明であることを知りて居りますから、折角の御贈り物をありがたくうけ納めてよいのでありますが、夫に事へて生死を同くしようと誓うて居りますれば、一先づお返し申します、このとき兩眼は涙にみたされて、まだ嫁入せぬときに君と相逢はなかつたのが、何より遺恨であると悲しみましたことでありました、

王建

王建、字は仲初、潁川の人、大曆十年の進士、太和中陝州の司馬となつた、韓愈張籍と尤も相友と善かつたといふ、樂府歌行に工で、張籍と名を等しくして居る

宮詞二首

金吾除夜進儺名。畫袴朱衣四隊行。院院燒燈如白日。沈香火底坐吹笙。

字解 宮詞は宮中の雜事を歌ひたるものなり、金吾、金は金革(刀槍戟矛及びよろひの

類吾は禦ぐなり、金革を執りて御殿を衛り非常を禦ぐもの、近衛の役人なり、除夜、大晦日なり、大晦日に儺(おにやらひ)を行ふは昔よりの例なり、儺、名おにやらひを行ふ人名、進は進奏すること、畫袴、一句、隋宮の故事なり隋宮にては二百四十人の樂工を選び、赤幘襠衣赤布袴の拵ひにて、四隊となり惡鬼を追ひ拂ふなり、戌の刻(今の午後八時)に、三たびの儺を唱へて集り、上水の一刻(曉け方)に至り、天子出てゝ殿に御せらる、それにて儺も終るなり、畫袴はうつくしく彩りたる袴をいふ、院々、二句、儺後の有樣なり、院々は御殿をいふ、燒燈、儺後に蠟燭を燃す例あり、沈香、一句、隋宮にては蠟燭の代りに沈香を燒けり、其故事を用ふ、笙は樂器なり、

義解 此詩は宮中のおにやらひを歌ふたものである、隋宮の故事を用ひて歌ふたのは、餘り華奢に流れたるを諷したのであらう、今日は大晦日なので、近衛の役人はおにやらひする人名を進奏し、夜になると畫袴朱衣の打扮で、四隊となつて惡鬼を追ひ拂ひつゝ宮中をねり歩く、かくて天子も出てゝ殿に御せられ式も終ると、御殿〳〵の前に沈香を燒いて明なることは白晝の如くである、其香氣馥郁たる傍には、樂工が坐して笙を吹き太平の曲を奏して居る、誠ににぎやかに立派な事である

内人相續報花開。 準擬君王便看來。 逢著五紋紅繡袋。 宜春院裏按歌回。

字解 内人、敎坊配に妓女宜春院に入る、之を内人と謂ふとあり、宜春院は宮城中に在る殿名、五紋五色の糸、

義解 宮中に於ける妓女の遊戯を詠じたのである、内人たちが相續いて花の咲いたことを知らする、それを天子樣が花を看にお出になるのになぞらへて戯れて居る、さうして五色の糸で飾つた紅繡の袋に出逢ふと、宜春院の内に歌を考へつゝ回つてくる

賈島

賈島字は浪仙范陽の人、初め僧となり無本と號し、法乾寺に住して居たが、東都に來て、韓愈の指導によりて還俗し、進士の試に及第し長江主簿となつた、後普州の司參軍より司戸に遷りしが、未だ命を受けずして卒した、時に會昌三年(西紀八百四十三年)、年は六十であつた、

暮過山村

數里聞寒水。 山家少四鄰。 怪禽啼曠野。 落日恐行人。 初月未

終夕。　邊烽不過秦。　蕭條桑柘外。　煙火漸相親。

字解　初月は、新月、末終夕、末だ夕ならざるに出づといふこと、行人、旅人、邊烽、一旬、邊烽の急なる秦地を過ぎずといふこと、邊烽は國境の邊地てあげるのろし、桑柘桑樹なり、

義解　夕暮山村旅行のさびしく恐しきを詠したのてある、數里の間さむくさびしく流るゝ谷川の水の音をきゝつゝ歩くうちに、家が見ゆるが山中のことゆゑ四方鄰に家もない、山をすぎてたゞひろき野に出ると、啼き叫ぶ、其の内に日が西山に入ると旅人は恐ろしくて安き心もない、それに新月がまだ夕ならざるに出て、木の間を漏るゝのをみると、いやに物凄い樣てある、けれども邊烽のしきりにあがる秦の地を過ぎないのだから、難義は難義だがまだこらへられる、若しも邊烽一たび此地に至らば、寇兵の恐るべき怪禽などの比てはないのてある、曠野を行きつくると、蕭條たる桑柘が見えて、其間から煙や燈火がちら〳〵望まれる、進めば進むほど次第に此と親むことが出來、遂に人家について始めて安心することが出來るのてある

姚合

姚合は陝州の人名高き姚崇の曾孫てある、元和十一年進士の第に登り、武功縣の主簿に任ぜられ、寶應中、監察御史に進み、諸官を經て開成の末に秘書少監、諫議大夫

となつて終つた。

送邢郎中赴太原

上將得良策。　恩威作長城。　如今幷州北。　不見有胡兵。　晉野雨初足。　汾河波亦清。　所從古無比。　意氣送君行。

字解　邢郎中、邢は姓、其名を詳にせず、郎中は官名、太原は今の山西省太原府太原縣に在り長城張九齡の詩の條に出づ、幷州山西省太同府一帶の地、幷州の北は蒙古に當る故に胡兵有るを見ずといふ、晉野太同以南及び以東一帶は昔の晉の地なり故にいふ、雨初足雨露のよく草木を霑ふす如く天子の御恩の充分に及ぶをいふ、汾河太原府の西に在る河、波亦清治り安かなること、

義解　此詩は邢郎中が、太原に駐屯せる某上將軍の幕僚となり赴任するを送つたのてある、太原なる上將軍は良き策略を行ひ得て、自ら萬里の長城となり恩威を示さるゝそれて只今は幷州以北に胡兵あるを見ませぬ、かくて晉野一帶は天子の御恩が充分に及び、汾河も胡馬に飲まれぬのて波も清く、誠に太平てある、かやうなことは古から比べられるものがない大功績てある、只今君が此名譽ある將軍の幕僚となり赴任せられるゝのは、何より喜ばしいことてあるのて、私は滿身の意氣に十二分の喜びを

あふらせてお送り申すことてある。

晩唐の詩

杜牧

杜牧字は牧之、樊川と號す、京兆の人、嘗て宰相てあつた杜佑の孫てある、進士に及第し、後賢良方正に擧げられ、江西團練府巡官より、累遷して中書舍人に至つた、人と爲り剛直にして奇節あり、小謹に齷齪するを爲さず、毎に大事を論列し利病を指陳すにこと尤も切てあつた、又好んて兵を談じ孫子を注した、從兄の悰が將相に至るに拘らず、己は困躓して振はざるより快々として、平ならず、太中六年(西紀八百五十二年)遂に卒した、享年五十、牧の詩情致豪邁、人之を杜甫に比し小杜といへり、牧は又風流才子て艶聞の世に傳はる者が多い。

泊秦淮

烟籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。

[字解] 秦淮は南京の淮青河なり、秦始皇東遊す、望氣者曰く、五百年の、後金陵(即ち南京)に天子の氣ありと、是に於て始皇山を鑿ちて瀆となし、以て地脉を斷つ、名つけ

て淮水といふ、秦代に開くを以て秦淮といふ、籠は包擧すること、商女は色賣る女なり、酒家は酒樓なり、江は川支那にては川を北にては河といひ、南にては江といふ、後庭花は音曲の名、陳の後主宮人の文學ある者を以て女學士となし、出游宴毎に諸貴人及び學士をして狎客と共に新詩を賦し、互に相贈答せしめ、其尤も艶麗なる者を采りて、以て曲調となし、被ふるに新聲を以てし、宮女の容色ある者千百人を選び、習ふて之を歌はしむ、其曲に玉樹後庭花、臨春樂等ありと南史に見ゆ、

義解 此詩は陳の故都たる金陵の秦淮を過ぎて、感ずる所を詠じたのである、烟は寒水をこめ包み、月は沙上をこめ包みて居る夜に、船は秦淮に碇泊した、其場處は酒樓の近かであつた、娼女といふものは亡國の恨などいふことを知らぬもので、川を隔てた樓上で、猶亡國の音たる後庭花の曲を平氣で歌ふて居る、誠に悲しいことである、

詩評 此の詩は唯所見を述べたゞけで少しも作者の思想を述べて居らぬが讀者は自然に一種の感想に打たるゝてあらふ、是れ唐人絶句の長技で後人は如何にしても及ばぬ所である、これ全く宇宙の萬象中より最も詩的の景象を取り善く之れを統一して詩的の言辭を以て善く之れを叙述するからである、而して其の詩的の景象を取るに當りて作者毎に異なる所がある、これに由りて讀者に悲感をも與へ歡感をも與へ其の他種々の感想を與へる、從ひて工拙が分かるゝが、杜牧の如きは晩唐の七言絶句家に在りては最も頭地を拔いて居る、此の詩の外にも佳作が多いが今は唯其の三四首を次に掲げて置く迄にする、

秋夕

銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲流螢。
玉階夜色涼如水。臥看牽牛織女星。

登樂游原

長空澹澹孤鴻沒。萬古銷沈向此中。
看取漢家何事業。五陵無樹起秋風。

赤壁

折戟沈沙鐵半銷。自將磨洗認前朝。
東風不與周郎便。銅雀春深鎖二喬。

江南春

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。
南朝四百八十寺。多少樓臺烟雨中。

李商隱

李商隱字は義山、懷州河內の人、少時より文を能くし、令狐楚に知られ其部下に屬した、開成二年進士に及第し、祕書省校書郎となつた、當時は牛僧孺、李德裕の二人

互に黨を、たて丶爭ひし頃なりしに、商隱は一往一反の間に逡巡せし爲、其官も上達することが出來なかつた、大中十二年(西紀八百五十八年)卒す、年四十六、商隱は溫庭筠と名を齊ふし、詩も亦怪誕なり、後人其詩を學ぶもの西崑體と稱して居る。

錦瑟

錦瑟無端五十絃。一絃一柱思華年。莊生曉夢迷胡蝶。望帝春心託杜鵑。滄海月明珠有淚。藍田日暖玉生烟。此情可待成追憶。只是當時已惘然。

字解 錦瑟、瑟を繪文にて飾る恰も錦の如よりいふ、無端、五十絃、漢書郊祀志に泰帝素女をして五十絃の瑟を鼓せしむ、悲し、帝禁すれども止めず、故に破つて二十五絃となすとあり、故に無端といふ、兼て瑟を見て端なく悲思の情の起るにかけていふ、柱はことぢ、華年は壯年なり、莊生、一句、莊子逍遙篇に、昔は周夢に胡蝶となる栩々然として蝶なりとあるをいふ、望帝、一句、昔人あり、杜宇といふ、蜀に王たり號して望帝といふ、宇死し化して子規となると、蜀記に見ゆ、又許愼の說文に、蜀王望帝其相の妻に淫し、慙ぢて亡げ去りて、子鵑鳥となる故に蜀人子鵑鳥を聞けば、皆起つて望帝といふとあり、此をいふ、杜鵑は子規なり、滄海、一句、文選注に月滿れば則珠全く月虧くれば則ち珠闕くとあり、又郭憲の別國洞冥記に、味勸國は日南にあり、其人象に乘じて海底に入り寶を取り、鮫人の宮に宿し淚珠を得たり、則ち鮫人泣く所の珠なりとあり、此等を綜合していふ、月明なれば珠全き筈なるに、闕けて淚あり、以て己れ淸平の世に生れて不遇なるに譬ふ、藍田、一句、藍田は山名、長安縣の東南にあり、美玉を產す、此句も前句と同意にて、藍田は日暖に照せども其玉は燒けて烟を生ずといふ意にて、己れ太平の世に生れ偉器を抱いて朽つるに譬ふ、當時は華年の時をさす、惘然はぼうとしたる貌、

義解 此は自傷の詩である、昔し泰帝は素女に五十絃の瑟を彈ぜしめ、悲しみに堪へず、破つて二十五絃としたといふことであるが、我も此錦瑟を見ると、端なく悲哀の情が起つて、一絃一柱悉く壯年時代のことが思ひ出さるゝ、其の頃は莊生が曉の夢に蝴蝶と化して迷ふた如く、思の亂れたこともあつたし望帝の春心を杜鵑に托した如く哀苦の情に迫つたこともあつた、月明に滄海に映つれども珠は闕けて淚あり日暖に藍田を照せども玉は燒けて烟を生ず、我も亦それの如く、淸明の夜に生れて偉器を抱いて朽つるかと思ふて、落淚に堪へなかつた、此の如き情は思ひ出せば出すほど悲みに堪へぬものて、固より之を他日に待つて追憶することが出來

やうや出來ぬ、が、光陰に關守なし、遙に當時に遡れば、其時已に惘然たる有樣であつた、さらば此情終に極る所はない、今日の悲みも仕方がないのである、

○附記、此詩は諸說紛々として一定せず、劉貢父は錦瑟を以て貴人の愛姬の名となし、計敏夫は商隱の知己たる令狐楚の愛妾の名となし、又蘇東坡錦瑟の聲を詠じ、適怨清和の意を唱へてから、前聯上句を適、下句を怨、後聯上句を清、下句を和の境遇を詠じたのであると說く人もあるが、皆附會の樣に思はれる、今は重もに何焯の解に從ひて說いた、商隱には又房中曲といふ詩がある、其中に歸來已不見、錦瑟長於人といふ句がある、此詩も此と寓意略々同じく、專ら錦瑟を賦するのではなく、錦瑟を見て悲みが起きたのだから悲みをいはんが爲に錦瑟を借りて來たのに過ぎないのである、

詩評 商隱は諸體ともに大概具備して居るが、中に就いて律詩が最も優れて見ゆる其の製作は古人の評したる通り沈博絕麗の四字が盡し得て居る、商隱は好みて故事を用うる僻がありて動もすれば其の眞意の在る所が知れぬ樣になることが多い然し又淺薄無味に陷ゐることはない、されば短處は長所で沈博絕麗も正しく此の中に發揮し得たるものである、錦瑟の一首に觀ても諸家の說紛如たるを以て此事が知れる、要するに商隱は杜甫を學びたるもので、而も亦模擬ではなく能く自運の神を以て行つて居る、晩唐では一流に居る作者である、

溫庭筠

溫庭筠字は飛卿といふ、李商隱と名を齊くし、世に溫李と稱せらるゝ、大中の末方山縣の尉を授けられた、

春江花月詞

玉樹歌闌海雲黑。花庭忽作青蕪國。秦淮有水水無情。還向金陵漾春色。楊家二世安九重。不御華芝嫌六龍。百幅錦帆風力滿。連天展盡金芙蓉。珠翠丁星復明滅。龍頭劈浪哀笳發。千里涵空照水魂。万枝破鼻團香雪。漏轉霞高滄海西。玻璃枕上聞天鷄。蠻弦代雁曲如語。一醉昏昏天下迷。四方傾動煙塵起。猶在濃香夢魂裏。後主荒宮有曉鶯。飛來只隔西江水。

字解　春江花月詞樂府體て陳の後主から起り、隋煬帝も作られた、此の詩は煬帝の事を歌ふたものである、玉樹花庭秦淮杜牧の泊秦淮の詩を見よ、花庭は後庭花なり、玉樹二句陳の後主荒淫して國を亡ぼせしことを叙す、海雲黑は黑雲の起ること即天下亂るゝにたとへ、青蕪國は荒れはてし國に草木の青々と生ひ茂れること即亡國にたとふ、金陵今の南京陳の後主の都せし處、秦淮二句秦淮の水揚子江に入りて金陵春水の色又漾うて江都(隋都)に至ること、即ち陳後主の荒淫が隋に流れ入り煬帝も亦荒淫になりしをいふ、楊家二世楊は隋帝の姓、二世は煬帝をいふ、煬帝は高祖の子なり、九重宮中不御二句華芝は車の日おひなり、六龍は天子の御馬をさす、六馬に御して巡幸民を省るとを嫌ひ、船を浮べて遊べるをいふ、煬帝が長安より江都に至るまで數百里の間、船を連ねて遊幸し豪華を極めしは人の知る所なり、百幅一句以下遊幸の有樣を叙ぶ、急就篇に四丈を疋といひ兩邊具はるを幅といふとあり、錦帆は錦にて作りし帆、風力滿は充分に風を孕むこと連天一句錦帆の長く連れる恰も金の芙蓉の天に連りたるが如きよりいふ、珠翠一句珠翠は眞珠や翠鳥の羽にて作れる裝飾をいふ、丁星は星の光と相對するなり、明滅は或は明に或は滅すると即ちちらゝ見ゆるをいふ、隋遺錄に、煬帝龍舟に御し、蕭妃鳳舸に乘る、每舟妙麗の女子千人を擇び彫版鏤金の楫を執らしむ、號して殿脚女といふとあり、此は殿脚女の裝飾にせる珠翠をいふなるべし、龍頭龍舟のへさきをいふ、哀笳笳は胡笛、哀は其音の形容なり、煬帝が新歌を作り又侍臣に作らしめて歌ひたるよりいふ、千里一句月を寫す、涵空空のはれ渡れるをいふ、照水魂水の底まで隈なく照すをいふ、萬枝一句花を寫す、兩岸の樹の白く雪の如き花が香よく鼻を襲ふなり、團はあつまる意、漏水時計、滄海あを海原、玻璃寶玉の名、天鷄淮南子に桃都山に天鷄あり日出つれば即鳴くとあり、たゞ曉方鷄の鳴くことなれどもおくゆかしく言ひたる迄なり、蠻弦琵琶なり琵琶はもと胡より來る故にいふ、代雁箏の一種、蠻弦一句大業拾遺記に煬帝沈湎度を失ふ、睡る每に歌吹齊く發じ方に一夢に就くとあるを指す、一醉一句昏々は精神のぼうとしてくらむこと、天下迷昏迷して天下の政を忘るゝをいふ、と共に萬民の途方にくるゝを指す、四方二句四方より兵起るも猶夢裏に在りて知らざるをいふ、大業十三年李淵京師に入り遙に帝を尊びて太上皇と爲し、代王侑を立てゝ帝となし義寧と改元す、翌義寧二年三月右屯衛將軍宇文化及等入りて宮闈を犯し上(煬帝)を溫室に弑すと史にあるを指す、後主陳の後主曉、鶯は後主が作りし淫歌、黃鸝留曲をいふ、鶯といふより飛來といふにて別に意なし、西江川の名、隔一水、後主の都金陵と煬帝の都の江都とは一水を隔つるに過ぎざるよりいふ、後主二句

後主が荒淫の結果はたゞ今曉鶯の曲のみ殘り宮殿は荒蕪と化し去つた、其風が又一水を隔つるのみなる江都に傳りて煬帝も亦運命を同しくする樣になつた、地の近きのみならず時も亦一瞬に過ぎなのかたといふ意、首句に後主のことより起したから尾も亦後主を引合に出して結んだのである、

義解 此詩は隋の煬帝が荒淫の結果國を亡したことを歌つたので、首四句は陳後主の沈湎亡國の事より筆を起し以て隋に入り、楊家八句は煬帝が龍舟に御して豪華を極めし有樣を、漏轉四句は沈湎昏迷天下を忘るを、四方四句は天下騷亂遂に後主と運命を共にするに至りたるを叙じ篇を結びてある、

玉樹の歌闌なる頃彼方の海上に黑雲漲り天下は修羅の巷と化し、後庭花の曲を奏せし花の都は、忽ち荒れはてゝ草木青々と生ひ茂れる國となりぬ、秦淮に水あれど水に情なく楊子江に流れ入りて金陵の春色をうるほし又漲ふて江都に入りぬ、後主の荒淫は隋都に流れ入り煬帝も亦之に倣ふやうになつたといふ意を含ませて見るべし、楊家二世は宮中に安坐まし〳〵漾ひ來れる春色に心奪はれ、六馬に鞭ち華芝の車に御して巡幸民の疾苦を問ふことを嫌はれ、龍舟に御し百幅の錦帆に十二分の風を孕ませて長安より江都へと遊幸あそばさるゝ錦帆の相連れるを遠くより望めば金の芙蓉の長く天に連れるが如く立派である、舟上幾千の殿脚女の飾れる珠翠は、星の光と相映してちら〳〵と光り美しさ得も言はれぬに、御舟のへさきが浪をひらきて徐に進むにつれて胡笛の哀れな音が歌に導かれて發する、それに空は青々と晴れ渡り千里の間月は皎々として水の底までも照し透し、兩岸の萬樹の枝には雪の如き花が香をあつめて鼻を破る樣につき來る、帝は此絶景に見とれて左右の美人に酌とらせて打ち興せらるゝ、かくて水時計は轉じて霞は高く青海原の西に罩めて、玻璃の御枕下に曉告ぐる天鷄の聲が聞ゆるときに、樂工は鑾弦と代雁とにて、ふし合せつゝ語るか如く笑ふが如く面白く奏づれば、帝は其をきゝつゝ昏々と、天下の事をも打忘れ華胥の國へ遊びたまふ、四方の民は手あらき政に堪ふべくもあらぬに、帝の遊に耽りたまふを見てより遂に忍びかねゝごた〳〵と彼方につどひあひ、馬蹄に煙塵を蹴りて都の方へと押し寄するも、帝は猶濃厚なる香ゆかしき奥御殿に樂しき夢のうちに遊ばれて知りたまはず、遂に刃の露と消えたまひぬ、陳の後主の樂みの果は、たゞ曉鶯の曲のみ殘りて宮は荒れ果てゝ誰訪ふ者もなし、其風は西江の水を隔つるのみなる江都へうつりきて、煬帝も一瞬の間に運命を共にせらるゝ樣になつた、思へば浮世ははかないものではないか、

詩評 溫庭筠は李商隱と名を齊くし溫李と並稱せらるゝが仔細に吟味するときは多少の相異した點がある、即ち麗なることは溫が李に勝れて居り、工なることは李が溫に勝れて居る、溫は比較的明瞭であるが李は頗る晦澁である、力量を論すれば李は溫の上に居るが天品は溫が李の上に居る、

許渾

許渾字は用晦、丹陽の人（金唐詩話には睦州の人とあり今は江南通志による）進士に及第し、太平尉を授けられ、大中三年に監察御史に進み、後疾を以て歸り、郢睦二州の刺史にて終つた、

金陵懷古

玉樹歌殘王氣終。景陽兵合戍樓空。楸梧遠近千官塚。禾黍高低六代宮。石燕拂雲晴亦雨。江豚吹浪夜還風。英雄一去豪華盡。惟有青山似洛中。

字解 金陵は今の南京にして、六朝建都の地なり、玉樹歌は歌曲の名杜牧の泊秦淮詩に詳解出づ、王氣は南史に、陳の後主、隋軍江に臨むと聞きて、曰く、王氣此に在り、虜必らず敗れんと、隋將賀若弼、韓擒虎采石を襲ふて之を取る、江に緣るの諸戍風を望んで盡く走る、擒虎城內に入る、後主乃ち井に逃るとあり、之をいふ、景陽は樓名、隋兵攻め來りしかば、後主は張麗華、孔貴妃と俱に樓中の井に投ず隋兵之を出す、楸梧共に樹名墓場に植るもの千、官は多くの官吏、禾黍はきび、六代吳、東晉、宋、齊梁陳にて、共に南京に都せり石燕、湘州記に零陵に石燕あり、風雨を得れば則ち飛翔し風雨止めば還た石となるとあり、江豚、猪に似て水中に居り、浪間に於て跳躍すれば風輙ち起る、故に揚子江濱の民は其出沒を以て風候となせり、洛中は洛陽、

義解 此詩は金陵に遊び六朝の興廢に感ずる所ありて詠したのである、陳の後主は專はら游宴を事とし國亡ぶるに至つたて、樂んだ玉樹の歌曲は今も猶殘りてあるが王氣は已に盡きてしまひ隋の兵合して景陽樓に入り、後主縛に就きて、其戍樓も已に空虛となつた、たゞ楸梧がおちこちに千官の墓場の間に聳え、禾黍が或は高く或は低く六代の宮殿の跡に生ひ茂つて居るのが見ゆるのみで晉のおもかげは一つもない、石燕が雲を拂ふて飛んで晴天であるにもかゝはらず雨が降り出し、江豚が浪を吹いて出てゝ夜また風が起るといふ凄涼たる光景のみ見ゆることである、あゝ英雄一たび去つて此都をすてゝより、豪華の遊は盡きてたゞ青山盤鬱、形勝自ら洛陽に似たるあるのみ、我をして之に對して、徒らに感慨に堪へざらしむることである、

詩評 晩唐に至りて懐古の作に長じたるものが二人ある、即ち許渾と劉滄とである共に主觀的議論を用ゐずして客觀的叙事を用ゐて居る、二人中にては許渾が優れて居る、而して其の景を寫すや自然に人をして凄凉の感に打たれしむる樣に出來て居る、此の詩の外に凌敵臺の

宋祖凌敵樂未廻。三千歌舞宿層臺。湘潭雲盡暮山出。巴蜀雪消春水來。行殿有基荒薺合。寢園無主野棠開。百年應作萬年計。巖畔古碑空綠苔。

の如き又は途經驪山の

聞說先皇醉碧桃。日華浮動鬱金袍。風隨玉輦笙歌迴。雲捲珠簾劍旆高。風駕北歸山寂寂。龍旗西幸水滔滔。貴妃歿後巡遊少。瓦落宮墻見野蒿。

の如き又は咸陽城西門晩眺の

一上高城萬里愁。蒹葭楊柳似汀洲。溪雲初起日沈閣。山雨欲來風滿樓。鳥下綠蕪秦苑夕。蟬鳴黃葉漢宮秋。行人莫問前朝事。渭水寒聲空夜流。

の如き皆集中の佳作たるに愧ぢざるものである。

劉滄

劉滄は字を蘊靈といひ魯の人である、大中八年進士の第に登り、華原の尉より龍門の令に遷りて歿した。

長洲懐古

野燒空原盡荻灰。吳王此地有樓臺。千年事往人何在。半夜月明潮自來。白鳥影從江樹沒。清猿聲入楚雲哀。停車日晩蘆蘋藻。風靜寒塘華正開。

字解 長洲、姑蘇の南に在り吳王闔廬の宮殿ありし處なり、越絶書によれば宮殿を作るため材木をあつむるに三ヶ年の日月を要し、夫れより五の星霜を經て成れりといふ、姑蘇は今の江蘇省蘇州府城の西に在る山なり、江、樹、川ばたの樹、清、猿、清くすゞしき猿のなき聲、楚、雲、楚の地方にたなびける雲なり、楚は吳より西にあたれり、故に西方の雲といふに同じ、蘋、藻、水草にて祭時に用ふ、蘋すゝめて祭る意、寒、塘、さびしき池のどて、

義解 野はやけて空原と化し見渡たすかぎり白き荻の灰のみ積みかさなりて居る、まことにつまらぬ處だが、昔は吳王が宮殿を建てつらねられたことがある、吳王が豪奢のことを懐ふと、今まではや千年たつて居るが、吳王はじめ其臣妾は何くに居るか、九地の下に永き眠に就て、たゞ夜半に月が明に照すのと、それと同時に彼方の川に潮

が自然にみちてくるのとだけ、昔のまゝである、一の白鳥がはるか向ふより飛んてきて川ばたに茂れる樹の間に入ると影は見えずなり(吳王の事業の復見ることの出來ぬのもこの通りぢやといふ意を含めてみるべし)清くすゞしく啼く猿の聲が西の雲の方へ消えゆくと何となく哀しき感じがする(吳朝のことを思ふと何となく哀れなる感じがするといふ意をふくめて見るべし)自分は夕ぐれに車を此處にとゞめて、蘋藻をすゝめて昔の人を吊ふと、ちようど間近にある池のさびしき堤に、靜かなる風の下に花が咲いて居るそれが空原と相對して人をしてます〳〵悽愴の感に堪へざらしむるのである、

陸龜蒙

陸龜蒙字は魯望、長興の人、松江甫里に寓居し、江湖散人、天隨子、甫里先生などゝ號した、天子高士を以て召されたが辭して出てず、皮日休等と友とし善く耕漁を以て樂として居た、歿年は詳ならず。

江南道中

一片輕帆背夕陽。望三峰拜七眞堂。天寒夜湫雪芽淨。雪壤晴梳石髮香。自拂烟霞安筆格。獨開封檢試砂床。莫言洞府能招隱。會輾飈輪見玉皇。

字解 江南、揚子江の東南の地をいふ道中道中にて作りしもの故にいふ、夕陽、夕日、三峯、茅山の三峯をいふ、茅山は江蘇省江寧府に在り、道家の寺ある處なり、七眞堂、大茅眞人、次茅眞人、小茅眞人、大許眞人、小許眞人、陽眞人、郭眞人の七眞人の堂にて茅山にあり、雪芽茶なり、梳石髮、石髮は水苔なり髮と云より、梳の字を用ふれども實は味ふとなり、江東地方は皆之を食ふと爾雅の注に見ゆ、烟霞かすみ、筆格、筆置き、封檢、藥ぶくろ、砂牀、草名、藥に用ふ深山石崖の間に生じ地を掘ること數十丈にして得るといふ、烟霞二句は身神を修錬して書を著し藥を煉るをいふ、洞府、猶洞中といふが如し五岳圖に赤城に洞府あり仙人之に居るとあり、招隱、隱士を招くこと、飈輪、風なり、玉皇、天帝をいふ、

義解 此の詩は和皮日休酔茅山廣文と題した本もある廣文は隱士で茅山に居るものである、龜蒙が江南の道中、揚子江に船を浮べて、遙に茅山を望み廣文の高風を美して作つたのである、友人の皮日休か廣文への返詩があるから直に其題に和したものである、

夕日をうしろに一片の輕帆に風を孕ませて大江を渡ると、遙彼方に茅山の三峯が巍然として聳ゆるを望み、其間にある粉壁鮮かなる七眞堂を拜すると、廣文君が此山

に在りて身神を修練さらるゝを想ふのである君は天寒き夜清らかな雲芽をそゝがれ、雪消えて空の晴れた日清き池中の水苔をとりて味はるゝ、其生活の此の如く恬澹なるのみならず經を著すときは机上にたなびける烟霞を拂ふて筆格を安んじ、藥をねるときは藥ぶくろを開いて砂牀をとり出していろ〳〵試驗せらるゝ、其怠らず身神を修練せらるゝことも亦此の如くである、人々よ五岳洞府中には仙人ありて能く隱士を招く、それ故君もそこへ行かるゝてあらうと言ふことをやめよ、君はそれ以上の高德であるから、君が風に乘り氣に御して天帝の御殿に朝せらるゝのを、早晩見るに出合ふであらう、

皮日休

皮日休、字は襲美、襄陽の人、咸通八年進士の第に登り、太常博士にまで進んだ、晩に黄巢の賊に降り後害せらるといひ、或は吳越の地にて終るといへど孰れが正しいか分らぬ、

館娃宮

艶骨已成蘭麝土。宮牆依舊壓層崖。弩臺雨壞逢金鏃。香逕泥消露玉釵。硯沼只留溪鳥浴。屧廊空信野花埋。姑蘇麋鹿眞閑事。須爲當時一愴懷。

字解 館、娃、宮、宮殿の名、昔吳王の建つる所にして名高かき美人西施の住みし所なり今の江蘇省州府の西南硯石山に其墟あり、艶、骨、艶麗なる美人の骨にて西施の骨をいふ、蘭、麝、蘭花と麝香との香をいふ、艶骨一句は西施ははや土となつてしまつたといふことなれど美人なるより蘭麝の土と化し去りたといふなり、層崖、高くかさなりあふて居るがけ、弩臺、石ゆみをするゐつけたる臺、金鏃、かねにて製せる矢じり、香逕、採香逕にて宮中名勝の一、玉釵、玉製のかんざし、硯沼、硯石山頂に在る池をいふ、屧廊、歩くとなる廊下にて宮中にあり、姑蘇圖經に吳王宮中に響屧廊あり梗梓の板を以て地に藉く、行くときは則聲あり故に名づくとあり、信、まかすこと、姑蘇、一句、姑蘇は山の名、蘇州府にあり、亦吳王の宮殿あり、吳越を破る、越西施を進め軍を退けんと請ふ、王之を許す、王西施を得てより荒淫度なく、日に姑蘇に遊ぶ、伍子胥諫めて曰く、臣恐る姑蘇にて麋鹿の遊を爲すときは、國久しからざるをと、王きかずと、史に見ゆ、麋は牝鹿なり、麋鹿の遊とは牡鹿と牝鹿と連れ合ふて遊ぶことにて、吳王西施と遊ぶに喩ふ、眞閑事とは子胥が諫めたが王はきかず閑事として居たとなり閑事はひまごとなり、愴いたみかなしむこと、

【義解】館娃宮懐古の作である、西施の艶しい骨は已に朽ちて蘭麝の香泥と化し去り、其の昔淫樂を恣にせし宮殿のかきはかたむきおしつぶれて、昔の通り高くかさなりあへるがけと相對して居る、此外宮中の名勝遺物はどうてあるかといふに、石弓のすゑ臺は雨のためにたゝきこはされて、かねの矢じりが所々から發見さるゝ、採香逕はどぶ泥に埋れて西施が取落した玉釵の破片があらはれて居るのが見ゆる、硯沼は遊ぶ者なくたゞ谷間を出づる鳥の沐浴所として留めてあるに過ぎず、屧廊は空しく埋れて名も知れぬ野花のおひつゝむにまかせてある昔し伍子胥が麋鹿の遊をしてはいけぬと吳王を諫めたが、王はひまごととして取合はなかつたので、とう〳〵滅亡の禍を起すやうになつた、それて自分は今、此宮址に遊んて當時の事を思ふと、どうしても一たびは懐をいたましめねばならぬてある。

【詩評】此詩も許渾劉滄の詩などゝ同樣に懐古の作てあるが其風が餘程遠つて居る、末の二句が即ち、其違ふ點てある、何故かといふに眞間事の三字が批評的て須爲の二字が議論的てある、是等が許劉二家の成さぬ處て皮日休が已に宋調を開いたといはるゝ點てあらう、

附、禪僧の詩

唐は最も佛敎の盛な時代て、高僧も甚だ多く、從つて詩文に工なものも少なくない其中て禪僧の間に起つた詩體がある、即ち偈語風な詩て、全く手に信せて拈弄したもので、詩格を以て之を律することは出來んが、機趣横溢誠に言ふ可からざる妙がある、後の道學者の詩は此より胚胎して其影響も亦少くない、因て此に其代表者たる寒山一人を拔きて、其詩の一端を紹介する、

寒　山

寒山は何許の人なるか詳てない、唐の太宗の貞觀中に生榮し、天台唐興縣の西七十里に隱居せる禪僧て、其居處を寒巖と號せり、時々また國清寺に往いて遊んだ、國清寺には拾得といふ隱僧が居る、二人の事はよく繪にも寫されて、世に知られて居るから、此には省略する、其詩は竹木や堂壁に書いてあつたのを、道翹といふ僧があつめて、漸く今に傳はることが出來たのてある、誠に思ひつくとすぐ書いたもので、題も何もない、

人問寒山道　寒山路不通。
夏天氷未釋　日出霧朦朧。
似我何

由屆。與君心不同。君心若似我。還得到其中。

字解 寒山は己れが住處なり、朦朧おぼろなること、似我何由屆似我とは形骸が我に似たりとものの意、屆はイタルと訓む、到着すること、君心若似我の似我は我心に似たらばの意、

義解 人が我が寒山に入る路を問ふた、寒山へは路が通じて居らない、何故とならば、夏の炎天でも氷が釋けず、太陽が出ても霧が朦朧とかゝつて、よく光を見る事の出來ない、寒い高い偏僻な處であるから、假令形骸が我に似たりとてどうして此にいたる事が出來やう、それは君の心は我と同じくないからである、君の心が若し我に似て無心であるならば、還つて其山中に到ることが出來るであらう、さらば別に路を問ふ要もない事ぢや、

可貴天然物。獨一無伴侶。覔佗不可見。出入無門戸。促之在方寸。延之一切處。儞若不信受。相逢不相遇。

字解 天然物は心を指す、佗はカレと訓むまた心を指す、出入無門戸、孔子が心を論じて操れば則ち存し、舍れば則ち亡す、出入時なく其鄉を知ることなしと、いはれたると同じ、促はちゞむること、方寸一寸四方にて心臟をいふ、一切處はあらゆる處までの意、

你汝なり

義解 天然の物即ち此心は貴ふ可き者である、心は獨一て伴侶がない、何處に居るかと、さがし覔めても見る事が出來ず、出入するにも門戸といふものなく、何處から出、何處から入るか少しも分らない、そうして之をちゞむれば方寸の間に在るも、之を延ばすときは、あらゆる處までゆき屆かぬことはない、誠に不可思議なもので、我佛とは即ち此ぢや、汝若し之を信じて受けがはないならば、汝の身は形骸のみて主(心)はないのである、されば凡て物に相逢ふてもそは形のみ遇ふたので、主人即ち心は相遇ふて居らぬのである

男兒大丈夫。作事莫莽鹵。勁挺鐵石心。直取菩提路。邪路不用行。行之枉辛苦。不要求佛果。識取心王主。

字解 莽鹵は粗略にして心を用ひざること、勁は強なり、鐵石心は堅忍不拔の心をいふ、菩提は梵語なり、正道の義なり、佛果は眞果に同じ、大毘婆沙論に出づ、眞覺の果位をいふ

義解 男兒にして大丈夫たる者は、事を作すにかりそめにも粗略にして心を用ひぬといふ樣な事ではいかぬ、強く鐵石の心を挺んでゝ、直に菩提の路を取つて進まねば

ならん、邪路は行くには及ばん、之れに行くといらんことに苦辛することである、さうして進みかけた以上は、佛果を求むることはいらん、心といふ王様の主を識りて、之を失はぬ様にするのが大切な事である、

徒閉蓬門座。頻經石火遷。唯聞人作鬼。不見鶴成仙。念此那堪說。隨緣須自怡。迴瞻郊郭外。古墓犁爲田。

字解 蓬門、蓬を以てふける門、石火、石をうつとぱつと出づる火をいふ、瞬間を保たざるものなるより光陰に譬へていふなり、緣は順なり、順當なる道すぢをいふ、郊郭、城より五十里を近郊といひ、百里を遠郊といふ、郭は城外なり、犁は鋤にてすくこと、

義解 徒らに蓬門を閉ぢて坐して居ると、頻りに光陰の遷るを經過する、人生といふ者は短い者で、たゞ常に人が死んで鬼となることを聞くが、鶴は長壽なものといへどまだそれが仙となつたのは見ない、此を念ふて見ると、どうして、說明の限りてない、それだから順に隨つて身を置き、自ら怡しむべきである、郊郭の外を廻りみて御覽なさい、古い墓はすきたふされて田となつて居るてはないか、いらん事をして此短い一生を過さず、靜に心王の主を識取して自然を恬しむ可きことぢや、

詩評 寒山の詩は篇什に富みて盡く一樣てはないが、大概皆主觀的て而かも其れが一種の幽遠なる理想より出てゝ居る、故に寫景の作ても單純の寫景てなく其の中に理想が包含せられて居る、往々勸戒の意を罩めてあるものも有るが要するに佛家の思想より來りたるものて就中禪定門よりせるものが多い、

唐以後の詩

唐以前の詩は唐に於て集大成せられた、唐以後の詩は唐を學ぶに過きぬのである、故に唐詩は儒教ていふと孔子といふ地位にある

宋時代　唐の末から詩風が纖弱に陷り五代に至り極まつた、宋初に楊億が李商隱溫庭筠(晩唐)の詩風を唱へて之を救ふた、世に之を西崑體といふて居る、五代の樣に衰颯の氣はないが猶纖巧を免れぬ、そこで王禹偁が白居易(中唐)の詩を師として之を矯正せんとしたが力足らず、是に於て歐陽修が出てゝ全く之を正しく改革した、修の詩は杜甫(盛唐)と韓愈(中唐)とから得たものである、其から宋一代の大詩人蘇軾が出た、軾は天分は李白(盛唐)に近く筆力は杜甫に近い、軾と並鑣して一派をなした者に黃庭堅がある、庭堅の詩は杜甫に本づいて拗峭に過きたものである、此派を江西派と稱する、二派の盛なるに從ひ弊が起つた、蘇派は波瀾はあるが句律が疎に江西派は鍛練精工だが情性が乏しい、そこで陳與義が出て杜甫を宗師として簡嚴と雄渾とを以て句律情性を正した、時に南宋の初である、續いて楊萬里、范成大、陸游の三大詩人が出た、三人は江西派の出身である、中に就きて游が一番である、游は杜甫に本づいて晩年には平淡に歸して居る、遊の派が盛になると疎漫といふ病弊に陷る樣になつた、是に於て姜夔、嚴羽、永嘉四靈派が出て之を救正した、夔と羽とは風格が高く中晩唐人の氣味があり、四靈派は賈島姚合(中唐)を師とし野逸清瘦を旨として居る、四靈とは徐照、徐璣、翁卷、趙師秀の四人で同じく永嘉の生れで同じく字に靈字をつけてあるからかくいふのである、此派が盛大に赴くと同時に、江西派の末流と合併して江湖派を組織した、其詩猥雜瑣細見るべき者がない、宋の滅ぶる時代に謝翺が出て李賀(中唐)に本づき之を正道に挽回し、遂に元代の風氣を開く樣になつた、

次に禪宗寒山の詩を宋になつて邵雍といふ學者が作り始め、後朱子が之を唱へ遂に道學者間に流行する樣になつた、

金時代　宋が江南に屏居した時に、江北に國を建てたのが金である、金は多く宋の文物を採つて潤色して居る、詩も亦其撰に漏れず蘇軾派と江西派とが最も盛に行はれて、未だ獨立旗幟を飜す者がなかつたが、晩に元好問が出てゝ杜甫を宗師とし二派の長を取り短を捨てゝ、一宗を建てた、それで金代の詩は殆ど好問一人に在りといふてもよい位である、

元時代　金を滅ぼし宋を平げて天下を一統したのは元である、元詩は金詩と宋詩

とを調和したものであるが平心に比較すると少し金音が勝つて居る、其代表者は劉因、郝經(金人)程鉅夫、趙孟頫(宋人)などの人々である、夫から宋末に流行した江湖派の風氣は依然として殘つて居たが、元初の四家が出るに至りて掃蕩された、四家とは虞集、楊載、范梈、揭奚斯である就中集を以て大宗とする、集は杜甫を學びて間々六朝に步趨し載は李白に、梈は杜甫に、斯は李白に法り旁ら三謝に及びて居る、夫れから吳萊薩都拉などいふ詩人が出た、

是より先北宋の頃から詞曲が行はれ元代になつてから詩に應用さるゝ樣になつた、其が爲に詩は著しく纖靡となつた、是に於て楊維楨が出て之を矯めやうとしたが、枉を矯めて直に過ぐるを免れなかつた、併し其樂府とか五絕とかは立派なもので、李白李賀から來て居る、維楨より少し先輩に黃溍といふ人があつて清老冲澹の音を唱へて之を救ふた其門人が明に仕へて陋風を一掃する樣になつた

明時代 明になつてから纖弱の風はなくなつた、其詩人をあぐると、開國佐命の元勳たる劉基がある、盛中唐の大家から力を得て居る、此派を越中の詩派と稱する、次に明初第一の詩人と稱せらるゝ高啓がある、唐人を宗脉として其他各時代の長所を採り一家をなして居る、此派を吳中の詩派といふ、啓に楊基、張羽、徐賁を加へて吳中四傑と稱する、此外江右詩派の祖たる劉松、閩中詩派の祖たる林鴻、嶺南派の主領たる孫蕡なとがある、就中林鴻は高棅と共に盛唐の詩風を鼓吹し後の所謂李何一流の先驅をして居るから其製作は上等でないが、詩學上には大功があるから忘る可からざる人である以上明初の詩風は元末の陋風を掃ふて雅正に歸したのである、

永樂以後になつてから臺閣體が起つた、首唱者たる楊士奇、楊榮、楊溥が臺閣の人々であるから臺閣體といふのである、詩は平正を主として晩唐の趣味が多い、一時非常に流行したが冗漫の弊救ふ可からざるに至つたので、李東陽、李夢陽、何景明の諸子が出て盛唐の調を唱へて遂に明詩極盛の時代を作した、即ち盛明時代である、就中夢陽は漢魏以來初盛唐に至る迄の諸家の長所を集大成して李杜の二家に折中して居る、當に盛明の大家たるのみでなく古今大家中で屈指の一人である、夢陽と景明とに徐禎卿、邊貢康海王九思、王廷相を加へて七才子と稱する、此外鄭善夫、于謙、楊一清、孫一元、楊愼、薛蕙、高叔嗣、華察などの詩人がある、

李何の風が盛に行はるゝと其弊が摸擬剽竊となつた、そこで嘉靖の初に、王愼中、唐順之、陳束、趙時春、熊過、任瀚、李開先、呂高の八人が出て、初唐の調を唱へて之を救ふた、世に之を嘉靖の八才子といふ、此に續いて四皇甫(皇甫汸、皇甫涍、皇甫冲、皇甫濂の四兄弟)が

出て、中唐の音を唱へた、かくて李何の餘燄漸く跡を絕たんとする時、李攀龍、王世貞の二人出て、之を中興し、再び盛唐の調に回した、之に和して起つた謝榛、梁有譽、宗臣徐中行、吳國倫、を加へて七才子といふ、前の七才子に對し後七才子ともいふ、此外前五子後五子續五子末五子廣五子などの名稱があるが、別に必要もないからあげぬ、

かく李王の詩風が盛に行はるゝや其弊復起り剽竊模擬李何の末流よりも甚しくなつた、是に於て隆慶の初三袁、袁宗道、袁宏道、袁中道の兄弟)出て清新輕俊の調を鼓吹した、之を公安の體といふ、公安體の弊處は戲謔に在り、そこで鍾惺、譚元春の二人が幽深孤峭の風を唱へて之を救ふた、之を景陵體といふ、

併し此二體は中音でない妖詩である、此が爲に風雅地を掃ふに至つた、そこで陳子龍が出て、之を矯正して雅正に回した、子龍は李白、高岑、李頎(盛唐)などを學んで一家をなしたもので、遂に明詩の殿をなした、要するに明詩は能く唐詩を學んだものである

清時代　清朝の詩は雍正以前は明末の詩風で以後になつて改つて居る、故に眞の清詩は雍正後といはねばならぬ、

明末に公安景陵の妖詩が流行するや、陳子龍と共に矯正した人には、清朝に事へ清初の詩宗となつた錢謙益、吳偉業がある、謙益は杜甫、白居易、蘇軾、陸游に出入し、偉業は初唐四傑白居易から力を得て居る、次に施閏章、宋琬がある(南施北宋施は敘景に長し宋は咏懷に秀でゝ居る施は遠く晉宋に胚胎し宋は漢魏に淵源して居る要するに此等の人々は唐人を宗とするも、宋元の調を雜へた者が多く、枯淡或は疎放の弊が起つた是に於て王士禎が出て神韻の說を唱へて之を救ふた、士禎は王維、孟浩然、杜甫、李頎(盛唐)錢起(中唐)の人々を師として學びて居る、同時に朱彝尊がある、其詩は唐宋を兼有して居る、此外嶺南の三家など作家は澤山ある、

以上の諸家について湯右曾、查慎行が出てゝ宋調を唱へ清詩の序幕を開いた、後に沈德潛が出てゝ古唐の音を唱へたが大勢の趨く所和する者は少かつた、是より少し後れて袁枚が性靈を主とした自己流の一派を開いた、和する者多く天下を一變する樣になつた、枚と相前後して蔣士銓、趙翼、張問陶などの作家が出たが猶湯查の上に出づることが出來ぬ、是から往尋として久しく振はず、同治中に曾國藩が宋の黃庭堅の詩を好みてから、臺閣に入る者は概之を宗とし、民間に在る者は間々溫庭筠、李商隱(晚唐)を追蹤し、以て今日に至つて居る、

以上要するに宋元二朝の詩は、唐を學びて未だ至らざる者、明詩は能く唐を學びて殆んど駕して之に上らんとし、清詩は唐を學び宋によりどつち付かずになつた樣な風

62
1106

てある

夫から支那の詩を通觀すると凡て三大變して居る、三百篇に剏り漢に至りて盛に、六朝の末に至りて弊る是が一變である、唐に至りて再び盛に宋元に至りて衰ふ是が二變である、明に至りて三たび盛に清に至りて衰ふ是が三變である、されば明詩は詩の殿後をなす者である、故に唐以後に於ては最も深く研究せねばならぬ、世に明一代を剽竊時代といふ人があるが、此は末流の弊を見て速斷したものて齒牙にかくるに足らぬ論である、

三唐詩解終